

「お言葉どおり、この身に成りますように！」の真意

清川 泰司神父

この大聖年に「聖母マリアの被昇天の祭日」を迎え、私たちはミサをささげます。この日は、第二次世界大戦の終戦記念日でもあり、戦後80年という節目の年にあたります。私たち信者は、聖書全体に描かれる救いの歴史を通して、人類救済を願う「神の御心(父と子と聖霊の一致の御心)」を知っています。だからこそ、このミサにおいて、私たちは人類が戦争を生み出す残念な要因、すなわち「原罪」の現実を見つめ直すのです。その認識は、私たち自身を回心へと導き、同時に、全世界の平和を願う祈りへと私たちを駆り立てるのです。

聖書から導き出されたカトリックの神学(伝承)に基づき、1981年、教皇ヨハネ・パウロ二世は広島平和記念公園にて「平和アピール」を発し、その冒頭で「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です。」と語りました。この言葉は、聖書全体が描く人類救済を求める神を知る人にとって必然的な言葉です。また、教会の伝承に基づき、教皇ヨハネ・パウロ二世は聖母マリアを通して、神への深い信仰に誘われ、世界平和を祈られました。その信仰の基礎には、聖母マリアが私たち信者の「母」であり、「信仰の模範」としての役割を果たしておられるというものがあります。この意味でも、私たちが「聖母マリアの被昇天のミサ」において聖母を思い起こすことは、一人ひとりの信仰を育む上で、極めて重要な霊的な時となるのです。

そこで今回は、その信仰を深めるために、受胎告知の時の「聖母マリアの信仰告白」に秘められた真意を深掘りし、その信仰の本質を、皆さんと共有したいと思います。その「信仰告白」とは、聖母マリアが天使から聖霊によって神の子キリストを宿したことを告げられた後に発した言葉です。それは「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」という言葉です。この「お言葉どおり」の「お言葉」とは、「神の言葉(ロゴス)」を指します。そして、この「言葉」は聖書全体に貫かれた神の意志を示します。聖母マリアの「この身に成りますように」とは、神の意志である人類救済の御心に完全に繋がる者になるという切望といえます。

さて、マリアが発した「お言葉どおり」の「神の言葉」についてより深い理解へと招くために、ここで、「聖書全体のストーリー(救いの歴史)」に貫かれる「神の言葉」の真意に迫ってゆきたいと思います。

・「聖書全体にストーリー(救いの歴史)」における「神の言葉」による創造の真意と救いの真意

神は天地万物を創造する時に「言葉」を用いました。そして、この「言葉」が人類を救うことについて「ヨハネの福音書」はコンパクトにまとめています。

初めに言があった。言(ことば)は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光(神の言葉)は暗闇(悪魔に支配された人類が営む社会)の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

(ヨハネ福音書1章1―5節)

聖書の天地創造の場面において、神は「言葉」によって天地万物、そして人類も創造されました。神は、その被造物を見て「それは極めて良かった」(創世記1:31)と満足します。また、神は人類をご自分の協力者として「楽園(神の国)」に住まわせます。しかし、楽園に蛇に扮した悪魔が現われ、悪魔は初代の人類に、神に「死ぬ」と禁じられていた「善悪の知識の木」の実を食べると、神のように賢くなると唆し、結局、人類は食べてしまうのです。その後、人類は「神の言葉」ではなく、自分本位の偏狭な知恵を頼りに生きようになります。これが神の言う「死」であり、神の言葉から離れ、悪魔の支配に陥った人類の現実なのです(原罪)。

神は、悪魔に支配された人類を楽園に残すことで、楽園が「裁きの世界」に変わることを案じ、人類をご自分の言葉を理解する迄、地上に追放します。地上に追放された人類は、案の定、自分本位の愛、正義、平和という偏狭な思考の

中で万物と他者を価値づけ、それが不和、争い、差別、支配を生むことになります。そして人類は悪魔の支配の協力者として、生きる事になるのです。人類は、神の言葉が理解できず悪魔の差し出す富、名誉、自己顕示欲、承認欲求、支配欲、情欲、保身を人生の目的とし発展を目指すようになります。神は、この発展が、いつか人類の滅びに起因することを危惧し、「バベルの塔」(創世記 11 章)において言葉を混乱させ、人類の偏狭で未熟な知恵による一致からの発展を遅らせるのです。このような観点から、聖書読者は、神が、現代でも立ち現れる人類の問題(自然環境破壊、戦争による被害の拡大、社会の格差)をあたかも見抜いておられたことを知るのです。このような聖書の本質を理解した者にとって必然的な考えを基に「教皇ヨハネ・パウロ二世」は「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です。」と語ったのです。

・人間を再創造するイエスの言葉

「旧約聖書」では、神はイスラエルの民を人類の模範とするために選び、民に、「預言者(神の言葉を預かる者)」を通してご自身の御心を示されました。しかし、イスラエルの民も「原罪」を持つ人間であり、悪魔の誘いの光である人間の欲望の投影物である偶像神に魅了され、神の言葉の真意を理解できません。

そのような人類の現実の中で、神は、今から約 2000 年前に人間の再創造(復活)の為に「神の言葉」を生きる「イエス・キリスト」を「聖母マリア」の胎内に聖霊によって宿らせたのです。聖母マリアは受胎告知を受け、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」と、神の人類救済計画に自分自身を完全に献げることを誓うのです。

イエス・キリストは、人類を悪魔の支配から解放し、創世記に記された「それは極めて良かった」(創世記 1:31)、「神はご自分にかたどって人を創造された」(創世記 1:27)という本来の姿に復活(再創造)させるために「神の言葉」を人々に伝え、生きられました。聖母マリアも、その協力者としてイエスが発する「神の言葉」に従って生きたのです(ヨハネ 2:1-11 参照)。そのイエスの言葉とは、すなわち「自分を捨て(悪魔に支配された自負心を捨て)」、「他者と万物を愛し」、「赦し」、「すべての人に仕えること」、そして「もっとも小さき者(無力な者)を大切にすること」、「敵をも愛し」、「祈ること」、「見返りを求めないこと」などです。この言葉にすべての人が生きることこそが、人類と世界の本来性、すなわち元々人類をご自分の協力者として造った神の意図に復活させるのです。そして、それが真の平和の実現につながるのです。その意味で、聖母マリアは、「お言葉どおり、この身に成りますように」と応え、イエスが十字架につけられてもなお、人類救済を望む神の御心への希望を貫きました。その信仰ゆえに、聖母マリアは世の終わり(世の完成)まで人類救済を求める父なる神のもとに昇天され、現代もなお、私たち人類の救いのために、天使(神の御心に全き従い、神を賛美する存在)と共に祈っておられるのです。

私たち信者は、聖母マリアの取り次ぎを通して、人類救済の神の協力者として生きる恵みを祈り求めています。そのため、私たちは「アヴェ・マリア」を唱え、聖母マリアのように神の計画に結び付けられることを望むのです。そして、「今も、死を迎える時も、お祈りください」の祈りにより、たとえ死の瞬間においても神の人類救済計画に結ばれた者として生きること望み、また、死に至っても、神が人類を慮る命が永遠であるがゆえに、その「永遠の命」に繋がることを望むのです。この理解が、イエスが言った「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」(ヨハネ 11:25)という言葉を理解する鍵となるのです。

私たちはミサにおいて、復活に招く「神の言葉」を聞き、御聖体を頂き「お言葉どおり、この身に成りますように」という聖母マリアの願いが実現し、「それは極めて良かった」(創世記 1:31)という者に復活するのです。このことを深く理解する特別な日が「聖母マリアの被昇天の祭日のミサ」といえるのです。

※何らかの事情によりミサに参加できない方もおられることでしょう。私たちはミサの中で、そのような方のためにも祈りをささげます。それは、神が、すべての人の救いを、世の完成まで永遠に望んでいることを信じるからです。